

看護学生と社会人の死生観の比較

眞鍋 知子, 天谷 尚子, 陳 俊霞, 山下 菜穂子

了徳寺大学・健康科学部看護学科

要旨

わが国は多死社会という課題を迎えており、このような状況の中で患者を看取る立場にある看護師には、ターミナルケアにおける看護の質がより強く求められ、看護基礎教育においてもターミナルケアや学生の死生観育成に関する教育が必要である。そこで本研究は、死に関するドキュメンタリー映画の視聴前後において、看護学生と社会人の死に対する考えの変化を比較することが目的である。死に関するドキュメンタリー映画を視聴した前後でA大学看護学生22名と一般社会人26名に死生観尺度を参考にして作成した質問紙調査を実施した。その結果、ドキュメンタリー映画を通して、学生が擬似的に死に直面し死について考えるという機会が死生観に何らかの変化をもたらしていた。このようなことから看護学生は、死を否定的側面だけでなく肯定的にとらえるように変化していることがわかった。

キーワード：看護学生、死生観、看護教育

Comparison of the view of life and death between nursing students and citizens

Tomoko Manabe, Naoko Amaya, Syunka Chin, Naoko Yamashita

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Ryotokuji University

Abstract

In Japan, which faces issues of a super-aged society, nurses play vital roles in attending patients' deathbed and therefore are required to enhance their nursing skills in end-of-life care. This study aims to compare the changes that occurred to nursing students and citizen in terms of their views towards death after they watched a documentary film on death. We conducted a questionnaire, which was made based on a death perspective scale, to 22 nursing students at a university and 26 citizens. The result shows that their views towards death were changed to some extent by the opportunity of vicariously facing death and thinking it over. It is also shown that they also came to view death positively rather than only paying attention to negative aspects of death.

Keywords : nursing students , view of life and death , nursing education

I. はじめに

平成28年（2016年）11月1日現在65歳以上の高齢者の人口は3,443万9千人であり、全人口の27.1%を占めており高齢者の割合は今後更に増加すると考えられる¹⁾。それに伴い亡くなる人は、2025年にかけて今よりも約20万人増加する見込みになり、わが国は多死社会という課題を迎えている²⁾。このような状況の中で患者を看取る立場にある看護師にはターミナルケアにおける看護の質がより強く求められ、看護師の死生観の形成が必要だと言われている³⁾。したがって、看護基礎教育でターミナルケアや学生の死生観育成に関する教育が重要となってくる。看護学生は、臨終に立ち会った経験が少ないことや子供時代に家庭で死の話題を語り合った

記憶がないことにより死に対し否定的感情を持つ学生が多く、死生観の形成にも影響すると考えられる⁴⁶⁾。看護学生の死生観教育において原は、死生観の学習には死について語り合い考える機会を増やすことが有効であると述べている⁷⁾。また、授業で死を迎える人に関するVTRや映画を視聴したことが、死に至るプロセスや現象を視覚として捉えることができ、視聴覚教材の活用が死生観育成に有効であるという結果が得られている^{8,9)}。

しかし、視聴覚教材の視聴により、死に対する考え方の変化を検討した研究は見当たらない。そこで、本研究は文化祭で上映した死に関するドキュメンタリー映画を視聴した前後で、看護学生と一般の社会人の死に対する考え方に関して比較し検討した。

Ⅱ. 研究目的

死に関するドキュメンタリー映画の視聴前後において、看護学生と社会人の死に対する考え方の変化を明らかにする。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象者

2016年度A大学の文化祭で上映した「いきたひ～家族で看取る～」を視聴した

A大学看護学生（以下 学生） 22名

一般社会人（以下 社会人） 26名

2. データ収集

2016年10月 A大学文化祭2日目 上映時間 1時間

「いきたひ～家族で看取る～」映画内容：子ども達と共に夫を自宅で妻が看取ったドキュメンタリー映画

3. データ収集方法

「いきたひ～家族で看取る～」の映画上映前と映画終了後に、「生と死に対する考え方」と「家族や大切な人の死に関する考え」について問う項目からなる質問紙を用いて、調査を実施した。質問紙は、平井らが開発した死生観尺度¹⁰⁾を参考にして筆者らが作成した。各質問項目の回答を「非常にそう思う」5点、「そう思う」4点、「どちらともいえない」3点、「あまりそう思わない」2点、「全くそう思わない」1点として点数化した。

4. 分析方法

学生と社会人の比較は、質問紙の項目ごとにt検定を行い、有意水準0.05未満を有意差ありとした。統計ソフトはSPSS24J for Windowsを用いた。

5. 倫理的配慮

本研究を行うにあたり調査目的、個人が特定されないこと、データは統計的に処理し個人情報に関しては秘密厳守すること、調査への協力は自由意思によることを口頭で説明し、映画視聴終了後に調査票の提出をもって本調査の同意を得たものとした。本研究は、了徳寺大学生命倫理委員会の承認を得た。（承認番号2833）

Ⅳ. 結果

1. 対象者の概要

文化祭での映画上映会場の受付で、本研究の調査票を手渡した。映画上映後に回収し、記入漏れなどのあるものを除いた有効回答数は、48部（学生22部、社会人26部）であった。対象者の概要は表1に示すとおりであ

る.学生が1年生から4年生まで参加しており,年齢の平均は 20.5 ± 2.5 歳であった.社会人は,31~80歳までの人が映画を視聴し,年齢の平均は学生は 58.0 ± 12.0 歳であった.学生は95.5%,社会人は73.1%が女性であった.死別経験は,学生の86.4%,社会人の96.2%が経験していた.死を考えたきっかけについては,学生90.9%,社会人96.2%が「あり」と答えていた.死を考えたきっかけとなったことについて学生は,テレビや映画や葬儀への参加,ペットの死によるが多く,社会人は家族や知人の死や葬儀への参加が多かった.

表1 対象者の概要

		学 生 (n=22)		社 会 人 (n=26)	
年 齢(歳)		20.5±2.48		58±12.03	
		人数(人)	%	人数(人)	%
性 別	男 性	1	4.5	7	26.9
	女 性	21	95.5	19	73.1
死別経験	な し	3	13.6	1	3.8
	あ り	19	86.4	25	96.2
死を考えた きっかけ	な し	2	9.1	1	3.8
	あ り	20	90.9	25	96.2
	自分の病気	1	5.0	7	28.0
	家族の病気	5	25.0	7	28.0
	家族・知人の死	7	35.0	17	68.0
	テレビ・映画	8	40.0	6	24.0
	葬儀	8	40.0	17	68.0
	本・雑誌	2	10.0	3	12.0
	講演の聴講	0	0.0	2	8.0
	ペットの死	8	40.0	4	16.0
	学校の授業	3	15.0	0	0.0
	臨地実習	4	20.0	1	4.0
	その他	3	15.0	2	8.0
宗 教	な し	22	100.0	7	26.9
	あ り	0	0.0	19	73.1

2. 映画視聴前の死に対する考え方について

「生と死に対する考え方」の項目について,学生と社会人とを比較したところ『2. 人は死後,また生まれ変わると思う』という項目において,有意に学生のほうが多かった.それ以外の項目について,学生と社会人との間に有意差はなかった.(表2参照)

表2 生と死に対する考え方（映画視聴前）

	学 生 (n=22)		社 会 人 (n=26)		t検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1. 死んでも魂は残ると思う	3.5	1.2	3.6	0.7	0.723
2. 人は死後、また生まれ変わ ると思う	3.6	1.0	3.0	1.0	0.038 *
3. 「死」は人生の完結である	3.5	1.1	3.3	1.1	0.550
4. 「死」とはこの世の苦しみか ら解放されることだ	3.1	1.1	2.5	1.1	0.058
5. 死ぬことがこわい	3.1	1.3	3.0	1.1	0.704
6. 「死」について考えると不快 になる	2.1	0.8	2.3	1.1	0.400
7. 人の生死は目に見えない力 (運命・神など)によってきめ られている	3.2	1.1	3.6	0.8	0.152
8. 「死」について考えることが 人を成長させる	3.9	0.8	3.7	0.7	0.407
9. 「死」を考えることは、生を 見直す機会になる	4.1	0.8	4.1	0.6	0.938
10. 「死」について学ぶこと・教育 は必要である	4.1	0.8	4.1	0.5	0.935
11. 死は「生」を意味付けるもの だと思う	3.9	0.8	4.0	0.6	0.633
12. 死について考えるからこそ、 命あることに感謝できるのだ と思う	3.9	1.1	4.1	0.7	0.327
13. 生きていることそのものが 尊いと思う	4.0	1.1	4.0	0.6	0.983
14. 「死」は人間にとって必要な ものである	4.1	0.9	3.8	0.7	0.292
15. 「死」をごく自然なものである と受け入れることができる	3.7	0.9	3.9	0.7	0.216
16. 「死」とはどういうものかを考 えることができる	3.7	0.7	3.7	0.7	0.817
17. 自分が死ぬことを考えると不 安になる	2.8	1.1	3.4	1.2	0.069
18. 自分の望む死を迎えるため に準備をする必要がある	3.7	0.8	4.1	0.5	0.064
19. 自分の「死」に対して心の準 備をすることができる	2.9	1.1	3.4	0.9	0.124
20. たとえ自分が近い将来死ぬ ことになっても冷静に対処す ることができると思う	2.6	1.1	3.0	0.8	0.104
21. 自分の「死」について真剣に 考えることができる	3.4	1.1	3.5	0.8	0.580
22. 自分の「死」について誰かと 語ることができる	3.2	1.1	3.6	0.7	0.124

* p < 0.05

「家族や大切な人の死に関する考え」の項目について、『23.家族や親しい人の死に対して心の準備をすることができる』『24. たとえ家族や親しい人が死んだとしても冷静に対処することができると思う』の項目は、有意に社会人のほうが平均値が高かった。『29.最期まで家族や親しい人に寄り添ってあげたいと思う』の項目は、有意に学生のほうが高い値であった。（表3参照）

表3 家族や大切な人の死に関する考え（映画視聴前）

	学 生 (n=22)		社 会 人 (n=26)		t検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
23. 家族や親しい人の死に対して心の準備をすることができる	2.4	1.0	3.4	0.7	0.00 *
24. たとえ家族や親しい人が死んだとしても冷静に対処することができると思う	1.8	1.1	2.8	0.8	0.00 *
25. 家族や親しい人の死について誰かと語ることができる	3.1	1.2	3.4	0.7	0.17
26. 家族や親しい人の死について真剣に考えることができる	3.2	1.2	3.5	0.8	0.45
27. 終末期(余命約6か月)にある身近な人の家族と接することは生と死を考える機会になる	4.1	0.8	3.9	0.6	0.41
28. たとえ子供が幼くても身近な人の死を体験させることは大切だ	3.6	0.9	3.5	0.8	0.73
29. 最期まで家族や親しい人に寄り添ってあげたいと思う	4.6	0.6	4.0	0.6	0.00 *
30. 家族や親しい人が亡くなった後でも自分の心の中で生き続けると思う	4.5	0.6	4.4	0.7	0.77

* p < 0.05

3. 映画視聴後の死に対する考え方について

「生と死に対する考え方」の項目については、映画視聴前と同様に『2. 人は死後、また生まれ変わると思う』という項目において、有意に学生のほうが高い値であった。さらに『10. 「死」について学ぶこと・教育は必要である』『14. 「死」は人間にとって必要なものである』の項目についても有意に学生の方が高い値であった。（表4参照）

表4 生と死に対する考え方（映画視聴後）

	学 生 (n=22)		社 会 人 (n=26)		t検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1. 死んでも魂は残ると思う	4.36	0.7	4.0	0.7	0.076
2. 人は死後、また生まれ変わ ると思う	3.9	0.8	3.4	0.8	0.038 *
3. 「死」は人生の完結である	2.5	1.0	3.0	1.2	0.121
4. 「死」とはこの世の苦しみか ら解放されることだ	3.2	1.1	3.1	1.0	0.735
5. 死ぬことがこわい	2.2	1.0	2.7	1.1	0.113
6. 「死」について考えると不快 になる	2.0	0.8	2.1	1.0	0.767
7. 人の生死は目に見えない力 (運命・神など)によってきめ られている	3.3	1.0	3.7	0.8	0.141
8. 「死」について考えることが 人を成長させる	4.4	7.3	4.1	0.5	0.124
9. 「死」を考えることは、生を 見直す機会になる	4.4	0.7	4.0	0.5	0.054
10. 「死」について学ぶこと・教育 は必要である	4.5	0.7	4.2	0.4	0.049 *
11. 死は「生」を意味付けるもの だと思う	4.3	0.7	4.0	0.4	0.150
12. 死について考えるからこそ、 命あることに感謝できるのだ と思う	4.4	0.7	4.1	0.5	0.189
13. 生きていることそのものが 尊いと思う	4.4	0.7	4.2	0.6	0.369
14. 「死」は人間にとって必要な ものである	4.4	0.6	3.9	0.7	0.009 *
15. 「死」をごく自然なものである と受け入れることができる	3.8	1.0	3.9	0.7	0.658
16. 「死」とはどういうものかを考 えることができる	4.1	0.7	3.9	0.5	0.337
17. 自分が死ぬことを考えると不 安になる	2.5	1.0	3.1	1.0	0.026
18. 自分の望む死を迎えるため に準備をする必要がある	4.1	0.8	4.1	0.7	0.959
19. 自分の「死」に対して心の準 備をすることができる	3.3	1.0	3.6	0.6	0.155
20. たとえ自分が近い将来死ぬ ことになっても冷静に対処す ることができると思う	3.1	0.9	3.5	0.7	0.060
21. 自分の「死」について真剣に 考えることができる	3.9	0.7	3.6	0.7	0.190
22. 自分の「死」について誰かと 語るすることができる	3.7	0.9	3.7	0.5	0.973

* p < 0.05

「家族や大切な人の死に関する考え」の項目の『24. たとえ家族や親しい人が死んだとしても冷静に対処することができると思う』については、有意に社会人のほうが平均値が高かった。『27. 終末期（余命6カ月）にある身近な人の家族と接することは、生と死を考える機会となる』『29.最期まで家族や親しい人に寄り添ってあげたいと思う』『30.家族や親しい人が亡くなった後でも自分の心の中に生き続けると思う』の項目は、有意に学生のほうが高い値であった。

表5 家族や大切な人の死に関する考え（映画視聴後）

	学 生 (n=22)		社 会 人 (n=26)		t検定
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
23. 家族や親しい人の死に対して心の準備をすることができる	3.3	1.0	3.7	0.6	0.087
24. たとえ家族や親しい人が死んだとしても冷静に対処することができると思う	2.8	0.9	3.4	0.7	0.009 *
25. 家族や親しい人の死について誰かと語ることができる	3.6	0.8	3.8	0.5	0.277
26. 家族や親しい人の死について真剣に考えることができる	3.9	0.8	3.8	0.7	0.770
27. 終末期(余命約6か月)にある身近な人の家族と接することは生と死を考える機会になる	4.4	0.5	4.1	0.4	0.041 *
28. たとえ子供が幼くても身近な人の死を体験させることは大切だ	4.1	0.7	3.8	0.5	0.244
29. 最期まで家族や親しい人に寄り添ってあげたいと思う	4.7	0.7	4.2	0.5	0.013 *
30. 家族や親しい人が亡くなった後でも自分の心の中で生き続けると思う	4.8	0.4	4.4	0.6	0.017 *

* p < 0.05

V. 考察

1. 生と死に対する考えの変化

看護基礎教育において、ターミナルケアを学び、生に対する考えや感じ方を見つめて死生観を育むことは重要であると考え、本研究において、映画視聴前は『2. 人は死後、また生まれ変わると思う』の項目のみ学生のほうが社会人より有意にそう思うと感じた人が多かった。映画視聴後は『2. 人は死後、また生まれ変わると思う』に加えて、『10. 「死」について学ぶこと・教育は必要である』『14. 「死」は人間にとって必要なものである』の項目についても有意にそう思う学生が多くなった。

看護師になるために個人の経験だけで死生観を学び育むことには限界がある。彦らは、看護師の死生観の形成には「経験」が大きな鍵を握るが、すべての看護師が同じ「経験」を経て成長するわけではない現状があり、個人の洞察が深められず不消化のまま否定的な感情を残すことがあると述べている³⁾。看取りの経験をテーマにした映画を素材として、死を身近に感じていなかった学生が間近に感じたことから、自分の生を考

えなおすことができたのではないかと考える。つまりドキュメンタリー映画を通して、学生が擬似的に死に直面し死について考えるという機会が死生観に何らかの変化をもたらしたと考える。園田らは、死生観の醸成には死別経験の有無ではなく、生や死について真剣に討議することが教育として必要であると述べている¹¹⁾。人生の終焉を肯定的に学生が受け止めることができるように、「死」について授業や学生間でのカンファレンス、実習での振り返りなどを通して、学生が学ぶ機会をできるだけ作る事が重要であると考え。

2. 死別体験による死生観への影響

死別経験において、学生は86.4%、社会人は96.2%が経験していた。死生観に影響を与える因子として死別体験が挙げられるといわれている⁴⁾。学生が死を考えたきっかけが多かったのは、葬儀への参列、ペットの死がいずれも40%であった。葬儀への参列やペットの死は、バーチャルではなく現実の死として死別体験を有している。また、テレビ・映画も40%と学生が死を考えたきっかけが多かった。学生は死別体験や臨地実習などを通し、死への関心を持ち合わせている。ニュース番組などは「三人称の死」であり、映画などは「作られた死」である。「三人称の死」「作られた死」であっても生と死の意味について考える機会は死生観を深めることにつながると考える。

「家族や大切な人の死に関する考え」について『23.家族や親しい人の死に対して心の準備をすることができる』の項目について、映画視聴前は社会人に比べて有意に学生の平均点が低かった。しかし、映画視聴後は、有意差がなくなっていた。これは学生が、映画を通して家族を看取る場面や亡くなったあとに感じた看取りに対する家族の考えを知り感じたことにより「心の準備」をするという意味や必要性を認識したと考える。また『27.終末期（余命6カ月）にある身近な人の家族と接することは生と死を考える機会になる』『29.最期まで家族や親しい人に寄り添ってあげたいと思う』の項目について映画視聴後、学生の方が有意に値が高くなった。加藤らは死生観を醸成させていくためには、死を否定的側面だけでなく肯定的にとらえることが必要であると述べている⁵⁾。また、アルファンス・デーケン¹²⁾は死の準備教育の主な目的を死を身近な問題として考え、生と死の意識を探究し、自覚をもって自己と他者の死に備えて心構えを習得することであり、よりよく生きるための教育であると述べている¹²⁾。死生観は、死の否定的な側面だけを見るのではなく、死を意識することによってよりよく生きるという肯定的な側面が含まれると考える。今回学生が映画を視聴したことにより、死生観を考える機会になり、看護師になって患者個々が望むその人らしい最期を援助するための礎となったと考える。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究は、A大学文化祭における映画上映の催しに会場した看護学生と社会人が対象であった。対象者数が少ないため、看護学生と社会人の死生観の違いを検証する上で限界がある。また、比較する対象者間の年齢の差が大きく、死別体験や死について考える機会に違いが生じていた。したがって死に対する受け止めについての違いが、映画視聴による死生観の変化にも影響が生じたと考える。しかし看護師になる学習途上の学生が、社会人と比較して本映画により死生観に変化をきたしていた事がわかった事は意義がある。

今後、看護学生の死生観の変化をきたす要因について明らかにし、死生観教育のあり方を検討していきたい。

VI. 結論

看護を学ぶ学生と社会人に対して、ドキュメンタリー映画の視聴の前後で死生観の調査を実施し、以下のことがわかった。

1. 死別経験は学生86.4%, 社会人96.2%であった。また死を考えたきっかけは、学生がテレビ・映画、葬儀への参列、ペットの死が最も多く（40%）、社会人は家族や知人の死、葬儀への参列（68%）と比較して、「三人称の死」「作られた死」が影響することがわかった。

2. 映画の視聴後『2. 人は死後、また生まれ変わると思う』『10. 「死」について学ぶこと・教育は必要である』『14. 「死」は人間にとって必要なものである』の項目が社会人に比べて有意にそう思うと考えた学生が多くなったことにより、「死」に関しての授業や実習でのカンファレンスなどを通して、学生が学ぶ機会を作る重要性を再認識した。

3. 学生は『27.終末期（余命6カ月）にある身近な人の家族と接することは生と死を考える機会になる』『29. 最期まで家族や親しい人に寄り添ってあげたいと思う』の項目について映画視聴後、有意に学生の平均値が高くなったことから、死を否定的側面だけでなく肯定的にとらえるように変化していることがわかった。

VII. 謝辞

本研究を行うにあたり、映画上映にご参加頂き調査のご協力いただいた皆様およびA大学の学生の皆様に心より感謝いたします。

引用文献

- 1) 総務省統計局：人口統計
<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/201611.pdf> (2016.11.28 11:00アクセス)
- 2) 厚生労働省:今後の高齢化の進展～2025年の超高齢社会像.平成18年9月27日.
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/09/dl/s0927-8e.pdf> (2016.04.26 17:00アクセス)
- 3) 彦聖美,浅見洋,田村幸恵 (2010) 看護師の死生観の学びと育み-A県における病院看護師と訪問看護師の比較調査より-.Hospice and care 18(1), 13-19.
- 4) 狩谷恭子,渡曾丹和子 (2011) 看護大学生における死生観と死に対するイメージの学年比較.医療保健学研究 2, 107-116.
- 5) 加藤和子,百瀬由美子 (2009) 看護学教育における看護学生の死生観に関する研究.愛知県立大学看護学部紀要15, 79-86.
- 6) 田代隆良,永田奏,出田順子,安藤悦子 (2006) 看護学生の死生観の学年間比較.保健学研究1, 43-48.
- 7) 原広美 (2015) 看護学生の死生観と望ましい死および学習経験との関連.神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究収録40, 47-54.
- 8) 前澤美代子,仲沢富枝 (2006) 看護学生の死生観の育成.山梨県立看護大学短期大学部紀要12, 1-14.
- 9) 石田順子,石田和子,神田清子 (2007) 看護学生の死生観に関する研究. 桐生短期大学紀要18, 109-115.
- 10) 平井啓,坂口幸弘,森川優子,柏木哲夫 (2000) 死生観に関する研究 死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証. 死の臨床23(1), 71-76.
- 11) 園田麻利子,上原充世 (2007) ターミナルケアの授業における学生の死生観に関する検討. 鹿児島純真女子大学看護栄養学部紀要 11, 21-35

12) アルフォンス・デーケン (1986) 死への準備教育. メヂカルフレンド社. 東京. 1-62.

(平成28年11月30日稿)

査読終了日 平成28年12月 5 日